

第三章 関西編

小山 正辰

第一節 嘉納治五郎と唐手

第二章関東編でも記されたように、1922年（大正11）年、富名腰義珍ふなこしぎちんが唐手を紹介した、というのが「空手道本土伝播の嚆矢」とされており、藤堂良明『柔道 その歴史と技法』（2014年、日本武道館）には、

「全ての演武が終了すると、嘉納が師範席から立ち上がり、永岡秀一指南役とともに袴の股立を取り、『形』の運足法や組手形の要領について質問を行った。『こう構えると、この角度からは、突きや蹴りは入るまい』とか『その捌き方は、重心が不安定になり、反撃の間が遅れてしまう』などの鋭い質問がなされ、それに対する説明がなされたのである」

「そして、富名腰に対し『沖縄の唐手術はどこに出しても、決して恥ずかしくない立派な武術です。この武術を本土で普及しようというお考えがあるなら、そのための協力は惜しみません』という激励の言葉をかけたのである。富名腰が沖縄への帰郷を延ばし東京に留まることになったのも、この激励に応えようとしたからであった」（同上、163頁）

と、嘉納治五郎かのうじごろうが富名腰に唐手本土普及を勧めるシーンが描かれている。

なぜ嘉納は、このような熱い心で唐手に接し、関心を示したのだろうか。

嘉納がこの「運動体育展覧会」時、初めて唐手に遭遇したと思われる人も多いが、第一章で嘉手苜が記したように、その前に嘉納は、唐手に「会っている」。

1908（明治41）年8月9日、大阪時事新報の記事に、

「京都武徳会青年演武大会において、柔道試合に先立ち内地人には頗る目新しい琉球唯一の武技唐手の型数番を沖繩中学の生徒によって演ぜられた。……（中略）……嘉納博士も固唾を呑んで注視て居た。」

「運動体育展覧会」の十数年前、嘉納は京都武徳殿において中学生の「唐手」を実見し、新聞も記事にしているのである。

さらに、その3年後、嘉納は講道館に修学旅行で東上した県立師範学校生を招き、愉快な交流がなされた。

『龍潭りゅうたん』という沖繩県立師範学校の同窓会誌の創立40周年記念号。

1911（明治44）年6月1日付け、となっている。

その記念号中に「唐手部記録」が掲載されている。記録者である山内盛彬、諸見里朝保はこの時の報告、冒頭にこう記している。

「何と本年四月、修学旅行の三学年が本都に於いて柔道元祖嘉納先生をして嘆賞^{へきんぎ}辟易せしめたる一事である」

「唐手部記録」と題された嘉納治五郎と師範学校生6名のやり取りは嘉納の人柄、生徒たちの屈託の無さが存分に發揮されており、後年嘉納治五郎が唐手に見せた破格の厚意はまさにこれが原点、と思わされるほどである。

ここからは、嘉手苅徹氏が発掘し発表した貴重な記録を、『空手道研究』(14・15合併号)から再編してみる。

1 嘉納治五郎と沖縄県立師範学校生

生徒たちは明治44年(1911)4月、修学旅行のために東京に赴く。

到着後、かねて訪問を約していた、「嘉納治五郎先生宅」へ中村先生と共に向かう。

4月18日午後1時半、江戸川橋電車終点で下車。